

第二話

女剣士・母衣菊乃、赤牛弥五右衛門登場

夜鷹長屋から半刻ほど歩いた先に、寂れた道場がありました。

壁にはあちこちにヒビが入り、窓の障子は穴が空いてすきま風にさらされつばなし、玄関は塵だらけで箒や手桶が散乱し、今にも崩れ落ちそうなゴミ屋敷。

「まさか、ここじゃないでしょうね」

打って付けの用心棒が住んでいるという道場の、あまりの荒れ具合に茫然の態の八重に、荒牧小夜は笑顔で「ここなの」と頷き、

「腕はいいけれど、道場の経営者としては不器用で、明日の食事の手当てさえつかない体たらくなの」

「えー、だからこれを用意させたわけ？」

と八重は小脇に抱えた笹包みに目をやりました。ここに来る前に、小夜の指示で、夜鷹たちに作らせた握り飯が三つ、竹笹に包まれています。

「そうよ」

涼しい顔で答える小夜に、八重は、

「握り飯三つで引き受けてくれる用心棒って、信用していいのかなあ」

と呟いていますと、どたどたと床を鳴らす足音が響き、玄関から悲鳴をあげて転がり出てきた町人風の男がいました。両手で股間を抑え、よたよたと走って逃げようとする背後から、

「待てえ！」

と飛び出してきたのは、道着を着込み、手に竹刀を提げた女剣士。

色白でふっくらした愛嬌のある顔立ちですが、道着の袖から覗くたくましい腕や、しっかりした足腰から、そうとう鍛えている事が伺えます。

「まだ稽古はおわつとらん。師匠に礼もせずには逃げ出すとはなにごとだ！」

怒鳴りつける女剣士に、町人は泣きそうな顔で抗議しました。

「冗談じゃありませんや。男のきんたまを蹴り上げる剣法なんて聞いたことねえ」

「馬鹿を申せ。剣は戦場での命のやりとりだ。敵の急所を攻撃するなど、当たり前のこと

とだ！」

「あ、あつしは町人です。命のやりとりを習う気はござんせん。きんたま潰されちゃかなわない。これで失礼させていただきやす」

「潰してなぞおらん。だいぶ手加減しておるのだ」

「いえ、あれが手加減なら、これ以上では命にも関わります。お願いですから帰らせてください」

「あ、待て、飯の種！」

よろよろ逃げ出した町人の後を追おうとした女剣士、玄関で何につまづいたか、すつてんころりんと前のめりに倒れ、三和土におでこをぶつけ、「いったくい！」と呻きながら顔を上げ、ふと、呆れたように成り行きを見ている小夜と八重に気付き、

「あ、小夜さん！」

女剣士は慌てて立ち上がり、立ち上がったとたんに、今度は膝の痛み気づいて「いててて」と膝小僧を押さえて腰を折る。

その様子に小夜、八重を見やうて肩をすくめ、

「菊乃さん、また、弟子に逃げられたの？」

と苦笑したのであります。

女剣士は名を母衣菊乃と申しまして、年は小夜と同じ二十歳過ぎ。父の母衣権兵衛はかつて小夜の父・荒牧源内と親友でありましたが、荒牧が切腹させられた時、その判決の理不尽さに旗本の身分を返上し、貧民街で道場を構えておりました。父の代にはそれなりに繁盛し、えいやあ、と賑やかな声が常に響いていたのでありますが、やがて成長した菊乃が剣を習い始めると、様子が変わりました。菊乃は生まれつき剣の才能に恵まれており、たちまち兄弟子たちより腕をあげ、十五になる頃には師範代すらかなわぬ剣の使い手に成長したのであります。

菊乃は、一種の合戦マニアでした。泰平の世にあつて剣の使い道のないのを悲しんで、古本屋から買い漁った源平合戦や戦国時代の軍記物を読みふけり、自分なりに実践的な兵法を練り上げ、道場の兄弟子相手に実践しはじめました。これが、道場衰退の大原因になつてしまつたのです。

菊乃の兵法には、牽丸蹴りが取り入れられておりました。剣で女に負けるだけでも屈辱的なのに、急所を蹴られて悶絶するのはたまらないと弟子たちは次々と去り、やがて父が

病死すると、まったくいなくなってしまう。

色白の、なかなか可愛らしい面立ちをした若い女道場主と聞いて、ちよつかいを出しにくる者はたまにありますが、さきほどの町人のように股間を蹴り上げられて逃げ出すばかりで、誰一人いつかず、ずっと窮状が続いているのです。

「ああ、久しぶりに、ごはんらしいごはん！」

小夜が八重に用意させた握り飯にかぶりつきながら、菊乃は涙をこぼしていました。

「そんな事じゃないかと思つて、持ってきたのよ」

と笑う小夜に、菊乃は、「かたじけない、かたじけない」と繰り返しておりましたが、やがて「ああ、おいしかった」とお腹をさすりながら幸せそうな面差しを浮かべた後、

「あら、この方は？」

初めて八重の存在に気づいたようでした。小夜は苦笑して、昨夜からの顛末を説明しますと、

「え……夜鷹……？ 私に、夜鷹の用心棒をせよ、と？」

眼を丸くする菊乃に、小夜は言いました。

「そう。川舟で一夜を過ごしたら、情が湧いてしまって、放っておけなくなったの」
その言葉に菊乃、穴があくほど小夜と八重の顔を見比べます。小夜は居住まいを正して頭を下げました。

「そういうわけで菊乃さん。三度の食事と、少しばかりのお手当は保証するわ。だから、引き受けていただけないかしら。このままじゃ、いつ犠牲者が出るか、分からない。それだけは阻止しなきゃならないの。お願い」

「うーん……」

菊乃は、腕組みをして考え込んでいましたが、やがて、

「申し訳ない！」

八重に向かって、額を道場の床にこすりつけて土下座したのです。八重は慌てて、

「あ、いや……ええと、面をおあげください」

慣れぬ敬語を使いますと、菊乃は顔をあげ、小夜に向かって言いました。

「小夜さん、私も、貧しさゆえに身を売っている夜鷹たちを哀れには思う。でも、ご存知だろうけれど、私はやはり、母衣家を再興したい。道場を再び繁盛させ、昔日の勢いを取り戻したいのだ」

「それは分かっているわ」

小夜は言いました。

「でも、お家再興のためには、お金も必要になるし、何より、明日の食事も事欠くような生活では、夢のまた夢よ。わたくしから時々賞与ボーナスを出すから、それを蓄たくわえてお家再興の資金にすればいいのでは？」

「それは、だめ……」

菊乃は、俯うつむいて首を振りました。

「小夜さん、あなたには頼りたくない。好意はありがたいけれど、今日は帰って」

「まったく強情なんだから」

道場を出てから、小夜は唇をへの字に曲げて言いました。

「腕は立つのだけれど、昔からああいう性格なの」

「幼なじみ？」

そう問う八重に、小夜は説明しました。

「わたくしが長崎に行った十歳まで、父親同士が親友だったこともあって、菊乃さんとは、一緒に遊んだり、ともに剣の腕を競い合ったりした仲なの。その頃から意地っ張りで、剣の勝負で負けた時など、こちらが根をあげるまで挑んできたわ。わたくしに対して、変な対抗心があるのよ」

「それだけかなあ……」

小首を傾かじげる八重に、小夜が「というど？」と問うと、八重はしばし考えていましたが、やがて口を開きました。

「なんて言うのか、あのひと、あたいと小夜さんの仲を疑ってるみたい」

「え？」

きよとんとした小夜に、八重は笑って言いました。

「やきもち焼いてるんじゃないかなあってね」

「え、そう？」

「長屋でも、あたいに惚れた夜鷹同士が、やきもち焼いた挙げ句に喧嘩するなんて事がよくあって、宥なだめるのに苦労するんだよ」

「……………」

眼を見張って面差しを強こわばらせた小夜に、八重は言いました。

「菊乃さん、そんな顔してた。絶対、小夜さんに惚れてるよ。だから、あたいのいる夜鷹

長屋の用心棒をやりたくないんじゃないかな」

「馬鹿な事を言わないで」

何時しか小夜の顔も真っ赤でした。

「わたくしと菊乃さんは、あくまで剣の友であり、助け合う幼なじみよ。それ以上でも以下でもない。そんな事より……」

小夜は話を変えました。

「もう一人、用心棒になってくれるかもしれない人がいるの。会いに行きましょう」

「へえ、どんな人？」

「なかなか、いい男よ」

「男なの？」

八重は一瞬顔をしかめましたが、すぐ思い直して笑顔を作りました。

「まあ、さむらい相手にやり合える女なんて、そうそういないもんね。小夜さんが推薦する男だったら大丈夫なんですよ」

「大丈夫よ。その男、きんたまが一つなくて、多分、女には興味ないはず」

「え、そうなの？」

「ええ」

小夜は澄まして言いました。

「わたくしが潰したの」

「お邪魔しますよ」

戸障子とじょうじを開けたとたん、

「きゃー、見ないで！」

と野太い声が響きました。

母衣菊乃の道場から半里はんり（約二キロメートル）ばかり歩いた長屋。戸を開けると、町人たちが住んでいる小汚い他の部屋と違い、きれいに掃除が行き届き、奥には位牌が飾られておりました。

その部屋に、中肉中背でおとなしそうな顔立ちをした、三十路手前みそじくらいの男が立っていたのです。丁髷ちんまげの結ゆい方から武士の身分である事は伺えますが、異様なのはそのいでたちでした。

顔わしろいに白粉を塗り、女ものの服を身につけているのです。

「また、母上の服を着てるの？」

荒牧小夜は、くすくす笑いながら、背後の八重を手招きし、部屋に入って正座しました。

「なんだ、小夜殿か。びっくりさせないでくれ」

女装した武士は、へなへたと畳に腰を下ろしました。

「滅多に人が入ってこない部屋に、いきなり女の人がやってきたから、てっきり母上が帰ってきたものと勘違いしてしまい、お見苦しい様を見せてしまった」

恥じらう武士に、小夜は頭を軽く下げ、

「ごめんなさい。驚かせる気はなかったのだけれど、久しぶりに弥五さんの女装姿が見られて嬉しかったわ」

「左様か」

と武士は、素直に笑みを浮かべ、それからかしこまって訊ねます。

「今日は何か、御用があつてのご来訪か？」

「お願いした事があるの」

「長くなりますか？」

「そうね」

すると武士は立ち上がって言いました。

「それでは、話の最中に母上が帰ってきては面倒。ちと着換ええます故、お目を背けてください」

やがて武士が男装に着換え終わると、小夜は、並んで坐る八重を指さし説明しました。

「こちらは、八重さん。芝新網町で夜鷹の元締めをやってる人」

「夜鷹の元締め？」

眼を丸くした武士を指さし、小夜は八重に告げました。

「こちらは、赤牛弥五衛門さん。知り合ったのは一年前。わたくしが大道で芸をしていたら、いきなり寄ってきて、日本娘とあろう者が異人の真似とは何事か！ と怒鳴りつけてきて、喧嘩になったの」

「そうでした」

赤牛弥五衛門という武士、懐かしそうに天上を見上げ、微笑みつつ言いました。

「あのとき、小夜殿にきんたまを一つ潰していただいたおかげで、拙者、真人間に生まれ変わったように思います」

「えー！」

八重は目を丸くしました。

女に寧丸を潰されるのは、男にとっては最大の屈辱のはず。

「きんたま潰されたことが、いい思い出だなんて、一体どういうこと？」

……話は一年前に遡ります。

荒牧小夜は、現在の港区青山あたりで、大道芸を行っておりました。当時、青山から渋谷にかけては未開の原っぱが広がり、官憲の眼も届かぬ地域だったのです。

髪を束ねて三つ編みの弁髪ふうに垂らし、胸と腰の回りを黒地のさらしで覆っただけの小夜は、原っぱの地面に置いた板の上で、足に履いた皮靴を踏みならして調子を作り、きれいな声音で歌いながら、激しく躍り舞います。その周囲を、武家の奥方や姫君、町人や農民のおばさんや娘も、ここでは全員平等、同じように興奮して嬌声をあげ、男拔きの興奮の坩堝にひたっております。

するとそこに、

「その方ら、不届きなるぞ！」

大声でわめきながら駆けてきた武士がおりました。言うまでもなく赤牛弥五衛門。

「一体なにごとか！ 恐れ多くも公方様のお膝元で、女だてらに肌をさらして歌い踊るとは、なんとたる不埒者」

観衆の女たちが呆気にとられるなか、弥五衛門は滔々と続けました。

「そもそも女の道というものは、家にあつては父母に孝養を尽くし、結婚しては舅姑に従い、老いては子に仕えるのではないか。それがこのような野放図な騒ぎっぷり。見れば武家の奥方様姫君様もいらっしやる様子、恥ずかしいとは思わないのか！」

「ちよつとちよつと、お武家さま」

小夜は、つかつかと弥五衛門に歩み寄りました。

「ここは青山、公方様のお膝元といつても、家ひとつ建ってない空き地じゃありませんか。男性と違い、お屋敷でも街中でも、羽を伸ばす事もままならない女の方々が、せめてこの空き地でのびのびと歌舞を楽しんでいたかどうかというのが、わたくしの芸。野暮な介入はやめていただけませんか」

「や、野暮だと！」

弥五衛門は、その名のごとく顔を真っ赤にして怒鳴りました。

「武士を愚弄するとは無礼千万。成敗してくれ！」

かくして、弥五衛門が打ち込む日本刀に、小夜が唐人剣とうじんけんで立ち向かい、凄絶なるチャンバラが始まりました。がむしやらに繰り出される弥五衛門の剣は、単に力まかせではなく、素早さがあり、さすがの小夜もその攻撃を受け止めるだけで必死でした。

「これは、やばいかも……」

かんかんかんと火花を散らす日本刀と唐人剣の撃ち合いのなか、小夜は眩きました。

「まさか日本の男に、これほどの使い手が残ってるなんて……」

泰平の世になれた日本の武士は、台湾で数々の実戦を体験してきた小夜の敵ではなかったのです。抜刀して斬りつけてきても構えが隙すきだらけで、股ぐらを蹴り上げれば呆気なく勝負がついたもの。

しかし、この赤牛弥五衛門は違いました。少しでも気を抜いたら致命傷を負う位置を攻めてくるのです。やがて小夜はじりじりと後ずさりするしかなく、集まってきた女性ファンの悲鳴が原っぱを満たしました。

「ええい、とどめだ！」

眉間をめぐけて振り下ろされた弥五衛門の刃を、小夜は危うく避けたものの、切っ先は小夜の胸を覆っていたさらしを切り裂き、はらりと落ちたさらしから、豊かな乳房が飛び出しました。

「あ！」

棒立ちになったのは、弥五衛門のほうでした。眼を丸くし、小夜の乳房を凝視しております。それを見逃す小夜ではありませんでした。

さっと間合いを詰めて、股間を蹴り上げます。つま先が陰囊いんのうに命中し、右の睾丸を破裂せしめた手応えを感じ、小夜はほっと一息つきました。

「なかなか、手こずらせたわね」

肩で息をしつつ、小夜は剥き出しになった乳房を気にもせず、強こわばっていた面差しにやつと笑みを浮かべました。

「お前、女人の乳を目のあたりにして、剣先を鈍らせるなんて、まさか童貞じゃないでしょうね」

その言葉に、息をつめて成り行きを見守っていた観衆たちが、どっと哄笑こうしょうしました。小夜は、女たちに手を振って場を盛り上げてから、さらに弥五衛門をからかいます。

「潰れたのは一個だけだから、ひよっとしたらまだ、女とまぐわう事ができるようになるかもしれないわ。望みは捨てないでね」

そう言って、弥五衛門に歩み寄ろうとした小夜は、不意に殺気を感じて、後ろに飛び退きました。

辜丸を一個潰され、袴の股間を破裂した辜丸から噴出した血で染めながら、弥五衛門は両手で刀の柄を握りしめ、ぎらぎらした眼で小夜をにらみつけているのです。

「意地をはるのはおよしなさいよ」

小夜は叫びました。

「きんたま潰されて痛いくせに！」

「せ、拙者は武士だ……」

弥五衛門は、声を絞り出しました。

「お前を成敗する、そう決めた以上、絶対に後には退かん」

「あきれたわ」

小夜は天を仰いで言いました。

「台湾の戦にも、泰平の世に飽きたお前みたいな武士が、密出国して参加してた。そういう意地っ張りのかつこつけに限って、あつという間に討ち死にして、なんの役にも立たなかったわ」

「なんとでも言え」

弥五衛門は、今にも倒れそうになりながらも、必死で立ち続け、なおも言い募ります。

「拙者は男だ。女に負けるわけにはいかんのだ！」

「ああ、日本の男って、ふたこと目には、そんな台詞ばかり！」

小夜は、心底うんざりした面差しで言いました。

「男だからなに？ 女だからなに？ お前は負けたの。女にきんたまを潰されたの！」

強ばっていた弥五衛門の面差しが、かすかにゆるみました。小夜は続けました。

「素直に負けを認めればいいじゃない。剣の腕前はわたくしより上かもしれないけれど、女の乳を見ただけで動揺してしまう未熟者だって。自分の弱さを見つめるのが、そんなに嫌なの？ 女はね、女というだけで、男より弱い、男より下だって決め付けられながら必死に生きているのよ！」

「そうよ、そうよ！」

遠巻きにしていた女性ファンの一人が叫びました。貧しい町人ふうの女でした。

「あたしなんて、亭主に殴られるのしょっちゅうだし、たまにこうやって小夜さまの歌を聴くのが唯一の慰めなの！」

「わらわもじゃ！」

と叫んだのは、御高祖頭巾で顔を包んだ大名の奥方でした。

「何事も、殿方に仕えるのが女の役目とされ、したい事もできず、我慢をしいられておるわれらの楽しみを、なぜ奪うのじゃ！」

「黙れ！」

弥五衛門は声を張り上げました。

「わしとて、好きで男でいるわけではない！ 好きで武士でいるわけでもない！」

そう叫んだとたん、弥五衛門は絶叫し、初めて潰された鞆丸の痛みに気づいたかのように、両手で股間を抑えて地面に倒れ、七転八倒して悶絶したのでありました。

「それから一ヶ月後だったわ」

小夜は、語り続けておりました。

「偶然、再会したの。夜の通りを女装して歩いていた。びっくりして聞いてみたら、なんでもわたくしにきんたまを潰されてからと言うもの、女装がしなくなったのだそうよ」

「ほんと、小夜殿には感謝しています」

赤牛弥五衛門は、小夜に向かって満面の笑みで言いました。

「拙者、幼い頃より、剣ばかりでなく、礼儀作法から何から、父に厳しく躰けられ、仕込まれて育ったのです。十五を過ぎた頃から、時々、急に女人の格好をしてみたくなる自分に気づきました。しかし、戦国時代以来、武勇を誇ってきた赤牛家を継ぐ者として、そんなはしたない真似ができるはずがない。拙者は、そう自分に言い聞かせ、欲望を心の底に抑えつけていたのです。まして、父が不始末から切腹し、浪人の身となつてからは、お家の再興こそがやるべき事。女装などとてもない、と」

弥五衛門は、天井を見上げ、感慨ぶかげに続けます。

「今から思うと、小夜殿に喧嘩を売ったのも、自分のなかの女がこみあげてくるのを否定しているのに、美しい異人姿で女たちの喝采を浴びている小夜殿に嫉妬していたのかもしれないませぬ」

「はあ……」

よく呑みこめず頭をかく八重に、弥五衛門は続けました。

「小夜殿に股ぐらを蹴られた事で、拙者、男であらねばらなぬという一念から解放されたようです。今では、母上の眼を盗んではございますが、心おきなく女装を楽しんでおり

ます」

「そうですか……よかったですね」

「ね、こういう人なら安心でしょう？」

小夜はにこにこして言いました。八重も、なるほど得心とくしんがいった顔で、

「確かにそうだね。おまけに小夜さんも負かしかけたほどの腕なら、言うことない。さっそく今夜から来てほしいくらいだよ」

「む？ なんの話ですか？」

怪訝けげんな顔になった弥五衛門に、小夜が説明しますと、「ほお、夜鷹の用心棒……」と呟つぶやき、腕組みしたまま考え込みました。やがて口を開き、

「それがしは異存はないが……母上がなんと言うか……」

と、奥に置いた位牌に眼をやります。小夜が問いました。

「母上は、いまだ仕官の望みを？」

「そうなんです、そこが問題なんです」

弥五衛門は頭を抱えた。

「あの四角四面な母上が、一人息子が夜鷹の用心棒になる等と聞いたたら、どれだけお怒りになれるか。考えるだけでも恐ろしい」

「そんなおつかないおつかさんなの？」

そつと訊ねる八重に、小夜は答えました。

「菊乃と同じで、お家の再興に人生の全てをかけているような方」

「じゃあ、それこそお家再興の資金を援助してあげれば、おつかさんも喜ぶんじゃない？」

「いや、それは無理です」

弥五衛門は首を振りました。

「お家再興のため、必要なのは武芸を磨くことの一事。そして、しかるべき伝手ついでに武芸を売り込むこと。ただし、賄賂まいたなどはもつての他、そんなことをするくらいなら、母子ともども腹をかき切って死ぬべきだというのが、母上の考えなのです」

「そりゃ困ったなあ。小夜さん、何かいい方法はないかねえ」

「そうねえ……」

小夜はしばらく思案に耽たづなっておりましたが、やがて顔を上げ、

「例えば、辻斬りが横行しているので、自警団の募集があったという話にすればいいんじゃないかしら。そこで手柄を立てれば仕官の道が開けるといふ事にして、母上を説得する

のよ」

「え、では母に嘘をつけと？」

「辻斬りが横行しているのは嘘ではないし、自警団と用心棒は、似たようなものでしょう。それに、万一、辻斬りを捕まえることができれば、評判になって、仕官させたいという大名が現れても不思議ではないわ」

「そんなものですかなあ」

「そんなものよ。それに……」

小夜は、不安に包まれた弥五衛門の顔をのぞき込むようにして言いました。

「用心棒になってくれたとして、やはり武士の服装でうろうろされては、商売の迷惑。夜鷹の恰好をしてればいいんじゃないかと思うの。正々堂々と女装できるわ」

「あ、なるほど！」

弥五衛門は両手を打って眼を輝かせました。

「よかろう、引き受け申した。さっそく母上を説得して、早ければ今夜からでも仕事に就くことに致します」

その日の夕刻。

太陽が西に傾きはじめてのを合図に、八重たち夜鷹長屋の面々が出勤の仕度にかかった頃、

「お頼み申す！」

長屋の木戸で大音声が響きました。

「うまくやったみたいね」

八重の部屋で白粉塗りを手伝っていた小夜は、してやったりと笑顔を浮かべました。

「わたくしの見たところ、あの赤牛弥五衛門、腕が立つ以上に、なかなかの教え上手なの。

そちらでも皆さんのお役に立てると思うわ」

「教えるって、剣術のこと？」

「ええ」

小夜は頷きました。

「どうかしら。長屋の夜鷹の方々に、昼間剣術指南をしていただいては。用心棒が駆けつけるのに間に合わない事もあるだろうから、やはり、自分の身を守る術を身に付けることも必要だと思うの」

「そりゃ、いい案ね」

八重は、身支度を終えて立ち上がり、弥五衛門を出迎えに、小夜と肩を並べて木戸に向かいました。

木戸を開けて、二人は仰天。そこに立っていたのは、手拭いをかぶり、白粉を首まで塗り、小脇にゴザを抱えた夜鷹姿の赤牛弥五衛門だったからです。

「似合うかしら……」

弥五衛門、頬を赤らめて俯くのでした。

さて、話は変わり、赤牛弥五衛門が夜鷹長屋に移って五日後。

ところは現在の有楽町あたり、南町奉行を務める三千石取りの小幡越後守の邸宅がございました。

「また騒ぎを起こしてくれたそうだな」

広大な屋敷の隅っこにある離れ、二間つづきの四畳半で、三十五歳になる小幡越後守は、上座で苦虫をかみつぶしたような面差しで、脇息にもたれて煙管をくゆらせつつ、下座に並んで畏まっている弟二人に言いました。

「これだから、その方ら、もう三十路というのに、養子縁組の声もかからんだ」

そう言われて、ますます肩を縮めて頭を下げるのは、次男の伝太夫と三男の七郎右衛門の兄弟です。

普通、三千石取りといえは、いわゆる旗本八万旗のなかでも飛び抜けた名家。いわばエリート中のエリートです。第一話で申しましたとおり、旗本の次男坊、三男坊といえは「部屋住み」と呼ばれ、役目に就くこともなく、結婚もできず、一生不遇の身をかこつものですが、三千石取りの家柄となれば、養子の口など引く手あまたのはず。

ところが、この伝太夫と七郎右衛門は、評判の悪い鼻つまみ兄弟だったので。

越後守の説教はつづきます。

「当然承知しているであろうが、その方らが昨夜、狼藉をはたらいた相手の能登屋長兵衛は、ご公儀（幕府）にも多大な献金をしておる豪商だ。わしが手を尽くして宥めたからよかったものの、もし訴え出られたら、わしとて奉行の座を追われかねなかったのだぞ」

「しかし兄上」

次男の伝太夫が頬をふくらませて抗議します。

「能登屋の奴、たかが商人の分際で、芸者を大勢あげての馬鹿騒ぎ、おかげでわれらは狭い小部屋しか与えられず、芸者も不細工なのしか寄越してくれません。いくら金があるろう

と、われら武士を蔑ろにするとは、腹が立ちませんか」

「そうです、そうです」

三男の七郎右衛門も口を揃えます。

「あいつのために、お目当ての浮橋太夫に逢うこともできず、まずい面を相手に高い金をふんだくられて、憂さ晴らしの一つがしたくなくなっても当然でしょう？」

「馬鹿者！」

越後守に怒鳴りつけられ、不出来な弟たちは、へへーと両手を畳につき這いつくばって土下座します。

「そもそも妓楼で町人相手に刀を抜いて暴れるなど、武士にあるまじき振る舞い、そんな事しておるから、部屋住のままなのだ。これ以上わしに迷惑をかけるなら、勘当してもよいのだぞ」

「そ、そ、そればかりは……」

「ご勘弁を。兄上、心を入れ替えます」

「真人間になりますので、どうかご容赦を」

伝太夫に七郎右衛門、必死に謝ります。勘当となれば財産ひとつ与えられずに放り出され、部屋住とは比較にならぬほど過酷な浪人生活が待っているのです。

「ほんとうに心を入れ替えるのだな？」

そう問われ、二人の弟は「誓います」とまとも土下座。それを見て越後守、「そうか」ともったいぶって言いました。

「ともあれ、その方らも何時までも無役の部屋住でいるわけにもゆくまい。そのためには何か手柄を立てて、養子縁組、あるいは他大名への仕官を目指さねばならん。もし、その方らがわしのため命を投げ出して働くというならば、手柄を立て、ご公儀のお役に立てる機会を与えてやってもよいのだが」

弟たちは顔を輝かせ、「やります」「どんな事でもやります」と膝を進めます。

「そうか。では何をするかは、この者から聞くがよい」

そう言っばんぱんと手を鳴らすと、襖が静かに開き、廊下に控えていたらしい黒衣着流しの武士が姿を現しました。年の頃は二十歳半ばか、色白の美青年です。

「元は因州鳥取、池田藩士であったが、今は仔細あって浪々の身、わしの元で隠密の任務についておる。この者の指示を仰ぎ、ともに協力し合って手柄を立てい」

そう言いはなつと小幡越後守、すつと立ち上がり、部屋を出て行きました。それと入れ

違いに入ってきた美青年、兄弟に向かい頭を下げ、

「平井権八ひらいしんぱちです。どうぞよろしく」

小幡兄弟、相手が浪人とあって、ころっと態度を変えて傲然ごうぜんと胸を張り、

「小幡伝太夫」

「その弟、七郎右衛門だ。兄上が申された隠密の任務とはなんだ」

「人斬りです」

こともなげな言いように息を呑む小幡兄弟を見やって、薄気味悪い笑みを浮かべた平井権八、さらにこう付け加えました。

「なに、あなた方でも大丈夫。斬る相手は夜鷹なのですから」

「よ、夜鷹？」

驚いて顔を見合わせる兄弟に、平井は説明しました。

当時の江戸には、日本橋の吉原、浅草の新吉原と、二つの遊郭が置かれ、幕府が営業許可を与えた女郎屋が軒を連ねておりました。その収益の一部は幕府に上納され、大きな財源になっていたのです。

それに対して、幕府の許可なしに売春を行う女は私娼と呼ばれていました。夜鷹もその一種です。

「ご公儀としては、秩序の安寧あんねいのためにも、風紀紊乱びんらんを防ぐためにも、いや何より財源確保、増益のために、吉原と新吉原を拡大したい。そこで邪魔になるのが、値段の安い夜鷹のたぐいです」

「それで、夜鷹を斬ると……？」

「そう、辻斬りの噂が広がれば、夜鷹どもも恐れをなして廃業する。それが越後殿の狙いなのです」

「で、その方は自分の手で夜鷹を斬ったのか？」

「拙者一人で、というわけではありませんが、そうですね、三十人ばかりも斬りましたでしょうか」

笑って言う平井に、小幡兄弟、ぞくりと背筋に冷たいものが走りましたが、平井は平然と続けました。

「実際、多くの町では夜鷹どもは姿を消し、吉原の客足は増えました。しかし、どうしても手を出せぬところがあるのです」

「どこだ？」

「芝新網町です」

この平井権八という男、池田藩の名家の子でしたが、二年前、たまたまのぼった妓楼ぎろうの遊女の色香に迷い、駆け落ちの約束をしてしまいました。家の財産を盗んで待ち合わせの場所に赴きましたが、結局遊女は現れず、平井は勘当された上、池田藩からも追放されてしまったのです。

自分の身を持ち崩させた女への恨みを晴らそうと、平井は江戸に赴き、毎夜、夜鷹を斬っておりましてところ、たまたま、同じ現場に居合わせた村木という武士と意気投合、やがて同じ「女嫌い」の部屋住たちが集まって「正義組」と自称し、夜鷹斬りを続けていたのです。

やがて彼らの行状は町奉行の知るところになり、全員召し捕られたのですが、奉行の小幡越後守は、彼らが無罪放免としました。

平井が語りましてとおり、夜鷹を一掃すれば幕府公許の遊郭が繁盛し、幕府への収益も増え、自身のさらなる栄達にもつながる、そう計算し、彼らに手当てを与え、夜鷹斬りを続けさせたわけです。

そして彼らが、芝新網町で、八重と荒牧小夜によって全員去勢された顛末は、第一話で語りましてとおりであります。

平井は、面差しを引き締めて小幡兄弟に説明しました。

「拙者の同志十六名が、五日前に芝新網町の夜鷹を斬りに赴いたのです。拙者は不覚にも風邪をこじらせ休んでおりましたが、翌朝、同志の一人を訪ねたところ、ふぐりを潰され、半死半生で床に伏せておりました」

「え、ふぐりを？」

青ざめる小幡兄弟に、平井は、いまいましてに、唇を噛みしめました。

「他の同志も同じ目に遭わされました。みな、正気を失い、廃人そのものです。任務を果たせば養子縁組の口を斡旋してくださると、奉行殿にお約束いただいていたのに……」

「しかし、十六人のふぐりを潰すとは、尋常なやり口ではないな」

小幡伝太夫が、腕組みして言いました。平井は頷き、

「しかも、同志の一人がこんなうわごとを言っておったのです」

「どんな？」

「女どもに潰された、と」

「女だと？」

小幡兄弟は顔を見合わせました。

「馬鹿な」

伝太夫は首を振って打ち消します。

「女の細腕で、旗本十六人のふぐりを潰すなど、そんな事があるわけない」

「拙者もそう思います。だが……」

平井は言いました。

「夜鷹たちが腕利きの用心棒を雇い、十六人を倒した後、夜鷹たちにふぐりを潰させたのかもしれない。あるいは、用心棒のなかに、女が混じっていたのかもしれない」

「そうだな」

七郎右衛門が言いました。

「何より、他の町の夜鷹どもが噂を聞いて、用心棒を雇って自衛を始めるかもしれない。そうなる、兄上の目論見の邪魔になる。ぜひとも阻止せねばならん」

「いずれにせよ、まずやるべき事は、夜鷹どもが用心棒を雇っているかどうかを確かめる事です。もし用心棒がいれば、金や仕官の口利きで釣って辞めさせる。後は、芝新網町の夜鷹ども、すべて成敗すればよいのです」

「ほう、女どもを血祭りにか」

伝兵衛はにやにや笑い、顎を撫でました。

「腕が鳴るのう」

「ただし、その用心棒どもが金や仕官の口利きでつれなかつたときは、これはもう合戦に及ぶしかありません。なにせ十六人を撃退した連中です。もっと多い仲間を集めねばなりません。それがしも務めますが、あなた方も御協力いただきたい」

「わかった」

七郎右衛門は言いました。

「近頃の女どもは、懐のあたたかい町人ばかりに靡いて、われら旗本の部屋住にははなもひっかけん。女どもを懲らしめてやりたい連中はいくらでもいる。任せておけ」

「ではまず人集めから。しかる後に、用心棒どもの正体を突き止めに参りましょう」

それから小幡兄弟は、部屋住仲間を通じて同志を募ったところ、「夜鷹征伐か、面白そうだのう」「泰平の世に手柄をあげるまたとない好機だ」「一度、人を斬ってみたかったのだ」と、さまざまな事情で、数日にして瞬く間に百名が集まったのです。(つづく)